

荒木寛二作 「きずな」

山田和子 あ、危ない！
(効果音) (バイクと車の衝突事故)
ナレーション 山田和子は、高校3年生。2学期の中間試験を前に、毎日夜遅くまで勉強していました。その疲れもあってか、バイクで近くまで買い物に出て間もなく、事故に遭ってしまったのです。

(効果音) (病院)
和子の母 和子！ 和子！ あ、目が開いたわ。和子、気がついたのね。あー、よかった。
和子の父 どこか痛いところはあるか？ 手足は動かせるか？ あ、先生、この子の状態はどうですか？
医師 幸い、頭はほとんど打っていないようですが、右足を折っていますね。しばらく入院しなければなりませんよ。そのほかは心配ないでしょう。
(音楽) (ブリッジ。重苦しい感じ)
父 (母に)それにしても、こんな大切な時に事故を起こすなんて、お前、和子に少しは注意するように言っていたんだろな？
母 もちろん言っていましたよ。でも、あの子ももう大人なんですからね。細かいことまでいちいち言うと嫌がるんですよ。
父 しかし娘なんだぞ。母親がいろいろ言うのは当たり前だ。もったきちんと言って置けば、こんな事故なんか起こさずに済んだんだ。
母 そういうあなたにも責任はありますよ。「仕事だ、仕事だ」と言って、夜遅く帰ってきて、子供のことなんか何も構ってやらないじゃないですか。何かあるとわたしのせいにばかりして…。
和子 やめてよ、もう！ そうやって責任のなすり合いするの！ 二人とも、わたしのことを本当に心配してるの？
父 当たり前じゃないか。だからこうやって大事な会議を抜け出してきたんだ。
母 そうよ、和子。あなたにもしものことがあったら、お母さん、どうしたらいいか…。
和子 ウソよ。お父さんもお母さんも、心配してるのはわたし自身じゃなくて、わたしが大学に行けなくなることでしょ？
母 だってお前、一人娘なんだし、大学だけはなんとか出て、そのうちお嬢さんでももら…。
和子 (さえぎって)やめて！ そんなの親のエゴよ。そうやって親の敷いたレールに無理やり乗せて、走り出すまでは、まるで腫れ物にでも触るようにして。わたし

はそれじゃ一体なんなの？ 同じ屋根の下にいるのに、血のつながった親子なのに、まるでバラバラじゃない！

ナレーション 和子の心は、傷の痛みにも増して、底知れぬ孤独感にさいなまれました。そんな和子を、翌日、早速友達の市川三枝子が見舞いに来てくれました。

市川三枝子 和子、どう？ 足は痛む？ でも我慢しな。すぐ治るよ。何かわたしにできることあったら手伝うよ。

和子 ありがとう。自分も悪いんだから我慢するよ。勉強遅れちゃうけど、しょうがないよね。両親も心配しているんだ。

三枝子 和子なら、すぐ追いつくよ。心配しない、心配しない。

和子 こんなにヒマだと、いろいろ考えちゃうんだよね。お父さんとお母さんがわたしのこと話したすと、必ずケンカになっちゃうのよね。わたしのこと心配してるつもりが、親の体面のことしか考えないのよ、結局。無性に孤独を感じるわけ。三枝子、この気持ち分かる？

三枝子 わたし、小学生の時、お母さん亡くしたでしょう？ それから2度目の母が家に来た時、初めはいろいろ反発したけど、だんだん新しいお母さんと慣れてきて、普通に話せるようになってきたのよ。なんだかんだ言っても、わたしにとってお母さんは、今のお母さんしかいないんだよ。中本さんと友達になって、何度か遊びに行っているうち、だんだん分かってきたのよ。

ナレーション 中本愛は、和子たちと同じクラスで、クリスチャンでした。
次の日、学校で――。

三枝子 中本さん。和子が入院しているの、知っている？ お見舞いに行ってきたのよ。

中本愛 知っているわ。今日にでも、わたしもお見舞いに行こうと思っていたの。和子さんの様子どう？

三枝子 まあ元気と言えるのかな。何せ動けないから、ショゲてはいるけどね。中本さん行くと、きっと喜ぶよ。ぜひ行ってあげて。

井上清 どいた どいた。狭い廊下でオシャベリは交通妨害だ。

三枝子 何よ、井上君。そんなにツツパらなくてもいいでしょ。あなたこそ静かに歩いたらどうなの？

清 へー。威勢のいいオバさんだなあ。じゃ、ごゆっくりおしゃべりください。

ナレーション 中本愛の家は、この井上清の家のすぐ近くでした。愛は、近所のうわさで、井上清の家のことを聞かされていました。清の父に好きな女性ができたこと。それを怒って清の母は家を出てしまったこと。清と弟で家のことをしていることなど聞き、愛も心を痛めていました。

愛 三枝ちゃん。井上君はつらいのよ。ご両親が別れてしまって、どうしていいのかわからないのよ。急にツツパリだしたのは、そのせいだと思うわ。

三枝子 そうなの。じゃ、彼も大人の被害者ね。“傷ついた若者”ってわけか。でもわたしたちの力ではどうしようもないものね。中本さんだったらどうする？

愛 そうよね。わたしたちには何もできないのよね。でも、井上君をほうっておくとどんどん落ちちゃうような気がする。だからなんとかかしたいと思うの。三枝ちゃん、わたし教会に行っているの知っているでしょう？ 最近ね、教会に来始めた方で、もっとひどい家庭だった人がいるんだけど、教会に来るようになって少しずつ変わってきたわ。だから井上君にも、教会に来るように誘おうと思っているの。

ナレーション 中本愛は、身近なところで次々と起こっている出来事は、形を変えていても、何か共通のものがあるように感じられてしょうがありませんでした。それがなんであるか、まだはっきりとは分かりませんが、確かにあるように感じられるのでした。

その日の夕方、愛は、病院に山田和子を見舞いました。

愛 和子、具合どう？ 寝てるのもラクじゃあないでしょう？ 今日、三枝ちゃんと会って、どんな様子か少し聞いたのよ。だけど足だけの傷でよかったね。

和子 ありがとう。今、特にないけど、少し退屈してたの。隣のベッドの人、今日退院しちゃったしさ。少し話して行ってよ。

愛 いいわよ。わたしも一度和子とゆっくり話したかった。

和子 わたしねえ、今まで、来年の受験のことで夢中になっていて、勉強のことしか頭になかったのに、もっと遠い将来のことや、家族のことや、友達のことや、取りとめもなく考えちゃうの。そして、ふと自分は独りなんだという思いがするの。不思議ねえ。愛ちゃんはそんなこと考えない？

愛 和子。あなた、大切なことに気づき始めたのだと思うわ。だってみんなは、今日も学校でそうだったけど、勉強のことで頭がいっぱいでしょう。口に出てなくても、みんな気にしているのは成績のことでしょ。そうやって、結局、一人一人心の中はバラバラなんだ。自分は自分、他人は他人という考えになっちゃうのよ。だけど本当はそれは違うと思うの。一緒に暮らしても心がバラバラでは、本当に悲しいじゃない。

和子 確かにそうよね。でもなかなか、同じ血のつながった家族でも、心の通い合いというか、“きずな”というか、あるようでないのよね。愛ちゃんのところはどう？ 以前三枝子から聞いたんだけど、お父さんもお母さんもクリスチャンだって？ もともと人間ができてるのよね。

愛 そんなことないわよ。時々ケンカもするけど、だからと言ってバラバラというんじゃないのよ。わたしたち、毎週日曜日は教会に礼拝に行くの。そこで聖書から説教があつて、わたしも父や母も一緒にそのお話を聞く。その時、わたし、なんて言うかな、うまく言えないけど、家族が一つだな、ということが実感として

分かるんだ。あなたも一度、礼拝に出席して、説教を聞くといいと思うわ。退院したら、一緒に出席してみようよ。実はね、井上君も誘おうと思っているの。彼も家庭の問題で悩んでいるようだから。

ナレーション

和子が退院して間もなく、中本愛に誘われて、彼女は清と一緒に教会の礼拝に出席しました。牧師の力強い説教に、初めての二人も次第に引き付けられていきました。

牧師

人が生まれて成長していく過程には、いつも強い“きずな”が必要です。多くの場合、それは、母親や父親であり、兄弟姉妹、祖父母、友人、また先生であったりします。子供のころは親とのきずなが中心になるでしょうが、年齢が高くなるにつれて、他人との関係が強くなり、そのきずなの対象は変わっていきます。幼いころは、血縁のつながりがごく自然ですが、やがて、それ以上に強いきずなが生まれてきます。さまざまな結びつきがその成長過程にあります。しかし、それらを貫いている共通のものがあります。それは、聖書のこの言葉に表されています。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」
預言者イザヤを通しての神の言葉です。そうです。神様は、わたしたち一人一人を愛し、尊い宝として見ておられます。そして、わたしたち一人一人を愛しておられるために、神のみ子キリストは十字架にまでかかってくださいました。このイエス・キリストを信じ、キリストの愛のもとに共に集まるところに、互いにかげがえのない価値を認め合う“愛のきずな”が生まれます。本当の家族が生まれます。兄弟姉妹、この強いきずなによって、あなたも歩みませんか？

ナレーション

山田和子と井上清は、「今、自分が神の愛に入れられている」との言葉に、言い知れぬ厳粛な思いを感じたのでした――。

<完>